下ノ原遺跡

第２次・第３次調査概報

茅野市教育委員会

1980

序　文

下ノ原遺跡は，茅野市玉川荒神部落の西で，八ヶ岳西山麓の広大な裾野の末端部近くにある。

この概報に記す発掘調査は，茅野市運動公園の駐車場建設に伴うもので，第2次・第3次調査である。第2次調査は，昭和51年4月3日から6月15日までと，7月24日から8月15日までの2度に行われ，第3次調査は，昭和53年7月22日から8月15日までに行われた。その実施は，茅野市から委託を受けた下ノ原遺跡調査委員会が当った。

第2次調査は，最初350m²であったが，その西部約800m²を追加調査をし，重復密集した住居址他多数の遺物が出土した。

第3次調査は，第1次第2次発掘区の中間にある薬師田と称する水田である。グリッドによる杭打ちにはじまり，発掘につれ6基の方形配置土坑の他多数の土坑が発見された。また，縄文前後期の土器片の他栗等の堅果類の炭化物が多量に出土した。

発掘した土坑が特定の方形配置土坑であることが判明したので，調査委員会では，その保存の必要性を認め，この土坑に山砂を入れ，その部分を覆い遺構群を砂壊することなく土盛りをした上に舗装して，駐車場とした。また，その一部は緑地帯として残すことにした。

第2次の調査は，宮坂虎次・鵜飼幸雄の両氏が当り，第3次は宮坂虎次・鵜飼幸雄・唐木孝雄・宮坂光昭の諸氏が担当した。この報告は概報であるので，宮坂・鵜飼がまとめ，実測図等の作成は守矢昌文が協力して出来上った。

この発掘調査は，第2次第3次とも完了期日が切迫しておったため，調査員はじめ調査参加者に無理をおかけしたことをお詫び申し上げるとともに，応援くださった大学生・高校生・小学生に厚く感謝申し上げたい。

とくに，発掘区域の拡大・期日の延長・土坑の保存等に理解を示された原田市長さんの文化財保護についての熱意に対し，深く敬意と感謝をささげて，序文とする次第である。

昭和55年　3月

茅野市教育委員会教育長　　木　川　千　年

目　次

序文
1．発掘にいたる経過……1
2．発掘調査の経過……1
3．遺跡の位置と環境……3
4．発見された遺構と遺物……5
5．まとめ……16

表紙写真　第28号住居址床面土器出土状態

裏表紙土器実測図　第23号住居址炉内出土土器（1/10）

例　言

1．本書は，茅野市運動公園建設区域内の駐車場建設に伴う下ノ原遺跡の第2次・第3次発掘調査の概報である。

2．発掘調査は，第2次調査が昭和51年4月3日より6月15日までと7月24日より8月15日まで，第3次調査が昭和53年7月22日より8月15日まで，別掲の下ノ原遺跡調査委員会が茅野市より委託を受けて行った。

3．本書は，本来であれば各調査員の担当による分担執筆となるところであるが，概報であるため，第3次分については唐木孝雄・宮坂光昭両調査員の了解のもと，2次・3次調査をあわせ，宮坂と鵜飼が話し合いのもとにまとめた。なお，実測図等の作成には守矢昌文が協力した。

4．出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管し，予定される正報告の刊行を目指している。

1．発掘にいたる経過

昭和46年，茅野市では各種のスポーツ施設を集中して建設する運動公園構想をたて，その用地として，玉川荒神・粟沢部落の西の一帯を選定した。この区域は，八ヶ岳山麓台地の末端が上川沖積地に接し，地形も変化に富み，市の中心部に近接しながら，広大な面積が畑・田・山林として残されていた。

運動公園建設工事は，昭和49年11月29日に着工された。そして，昭和53年度に開催を予定されていた国民体育大会軟式野球大会会場となる球場の用地が下ノ原遺跡一帯に建設されることとなり，茅野市教育委員会では，昭和49年に数度に亘り踏査を行い，遺跡の範囲を明確にするとともに，文化財審議委員会を開催して審議の上，記録保存することに決定した。

運動公園建設工事は，市都市計画課の担当するところであり，都市計画課と合議の上，調査事業を実施することになった。調査事業は，茅野市教育委員会の委嘱編成した下ノ原遺跡調査委員会が茅野市より委託を受けて実施した。そして，第1次発掘調査は昭和49年10月8日より12月21日まで，第2次は昭和51年4月3日より8月14日まで，第3次は昭和53年7月10日より9月8日まで行い，下ノ原遺跡の現場における発掘調査を終了した。

諏訪地方最大の規模をもつ茅野市運動公園は現在約70％の工事が完了し，野球場・バレーボールコート・体育館・弓道場・プール等の諸施設を備えて，市民に親しまれ利用されている。

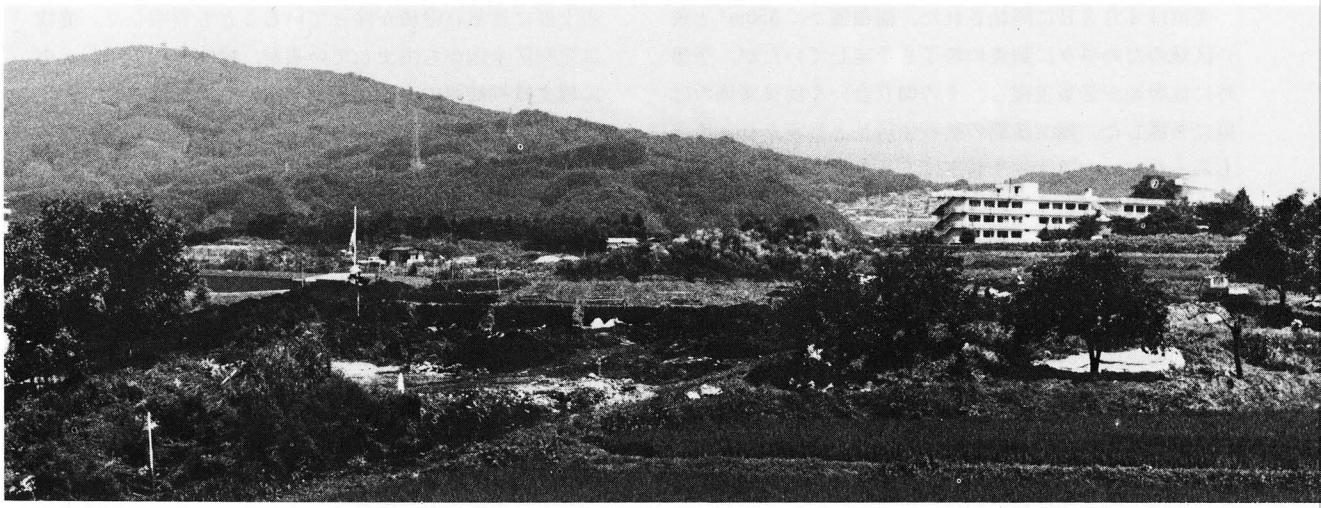


写真1　遺跡遠景（右の校舎は東海大学第三高等学校）

2．発掘調査の経過

第1次調査

第1次調査の発掘区は野球場建設用地であり，最も早く工事の着工された場所である。遺跡の範囲では北側に偏よった台地平坦面の畑地と台地南縁に近い水田である。未買収の畑や水田が発掘区の間にあったため，発掘の順序にしたがって第1区・第2区・第3区・第4区とした。

昭和49年10月8日に鍬入式を挙行して現場における作業を開始し，12月21日に終了した。この間，作物の収穫待ちの期間を利用して川久保古墳の調査も行った。発見された遺構は，縄文前期初頭の住居址2・中期住居址8・小竪穴15である。第1次調査分については昭和50年3月に報告書を刊行した。ここにその概要を記し，参考に供したい。

第1区　遺跡北寄りの平坦な畑地で，発見された遺構は発掘区南端に6mの間隔で，中期前半の竪穴住居址2号・3号と，東北隅の前期初頭住居址1・小竪穴6・独立土器1であり，総体的に遺構は稀薄であった。

第2区　第1区の北側グリットを西に延長した発掘区で，遺構も遺物も殆んど検出されなかった。

第3区　台地の南縁に近い水田で，西に傾斜する地形を均して二段の土手を築いた三枚の水田である。この東側に第3次に発掘した薬師田がある。水田のほぼ中央に東西に2m×50mのトレンチを設定し，地層および遺物の出土状態を調べてグリットを設定した。第3区は開田工事による削平と土盛り，それに水田耕作により攪乱を受けている。また黒土層は深く，遺構はローム層まで掘り込まれることなく構築されたものもあり，床面の検出が困難であった。第4号・5号住居址と小竪穴10ヶ所が検出され，また遺物のうちでは打石斧の出土量が比較的多かった。

第4区　第2区・第3区の中間の畑で，セロリーが栽培されていたため，その収穫後の12月後半に，寒気と降雪になやまされつつ発掘を行った。ここからは花積下層式期の前期初頭住居址1・中期住居址4基が発見された。

第2次調査

昭和49年の第1次調査後，運動公園建設工事は着々と進行し，すでに野球場はほぼ完成して付属施設としての進入路，駐車場の工事に着手したのが昭和51年である。下ノ原遺跡の，川久保川に南面する傾斜地は狭い区域であったが，地表面に遺物が散布していて遺構の埋蔵が予想されていた。ここは畑であり，わずか数年ほど前までは水田として利用されていたようで，更に南傾斜面は川久保川まで階段状の水田となり，薬師清水が湧出している。したがって発掘区は清水に最も近く，かつ南面して日当りのよい場所である。

発掘は4月3日に開始された。面積僅かに350m²と狭い区域のため早々に調査の終了を予定していたが，予想外に住居址が密集重複し，その切り合いや前後関係の把握に苦慮した。縄文後期の敷石住居址と推定される遺構もあったが，水田造成や耕作による攪乱がはげしく，敷石も撤去されており，明確な敷石住居址として把握することができなかった。また，晩期の条痕文土器片も検出されている。発見された住居址は12基，小竪穴11ヶ所である。6月15にようやくこの区域の調査を終了した。

この発掘区の西縁へ，臨時に上部の水田の水を落す排水路があけられ，その切り取りに遺構の存在が認められた。遺跡は更に西側に続くことは明らかで，すでに土盛りを始めた工事の中止を申入れると共に，あらためて都市計画課と調査の延期について協議することとした。

たまたま，この時，米沢塩沢のよせの台遺跡に工場が建設されることになり，これも極めて緊急を要したため，発掘はその方に移行し，6月16日に開始して7月14日に終了した。この間，教育委員会と都市計画課は合議を重ね，排水路西部分約800m²を発掘調査することが合意された。

後期の発掘は7月24日に開始されて8月15日に終了した。この区域もまた水田であったため，近世のガニ水道が構築されるなどして地層が攪乱されていた。排水溝に近い部分から重複する4基の住居址と小竪穴8基，及びロームマウンドが検出された。この区域は西に従って黒土が非常に深くなり，遺構の存在も予測されないため西側部分を放棄し，第2次調査を打切った。調査期間中は諏訪二葉高校地歴部の淑女諸氏が部活動の一環として発掘に参加した。

第3次調査

昭和53年秋に開催されることになっていた国民体育大会の軟式野球会場である茅野市運動公園野球場は駐車場の設備が不充分であった。かねてから公園の一画に取り残されていた水田，通称「薬師田」が買収され，ここに駐車場を設置することとなった。薬師田は，第1次・第2次発掘区の中間に位置する水田で，遺跡では最も重要な区域の一つと目されていた。ここは傾斜地を一枚の水田に造成したため，東部分は削平し，西部分は盛土したもので，少くとも半分の区域には遺構が保存されているものと推定され，調査の成果が期待された。発掘調査は1,627m²である。

調査は7月10日に開始された。初日は繁茂した草刈りに終始し，11日にグリッドの杭打ちを行い発掘作業に入る。発掘区の東部分は水田造成の際に基盤のローム層が削平されてはいたが，予想に反し遺構の遺存状態は良好であり，3基の方形配置土坑の他多数の土坑が発見された。遺構は西に移るに従い密集して検出され，これらの遺構の上部には集石遺構が伴っていることも判明した。遺物は発掘区全体から出土しているが，総体的に黒褐色土中に縄文後期初頭の土器片の出土が目立ち，M—7の表土下30cmの黒褐色土層からはクリを主体とした堅果類の炭化物が多量に出土した。各グリッドから前期末下島式土器片が多く検出され，殊にO·P—3·4グリットからは多量に出土し，住居址の存在が期待された。

発掘期間の全半はほとんど土坑の検出に費された。発掘区の南，西部分は水田造成の際の盛土が厚く，この除去には工事を請負っていた両角建設の機械力に負うところが大きかった。住居址は第2次の発掘区に続くものとして，南部分から西にかけて遺存し，発掘区の大部分が土坑により占められていた。

剝土と遺構の確認作業は一部を残して8月上旬にようやく了ったが，連日の酷暑に参加者も少くなり困難を極めた。7月23日からは茅野高等学校地歴部が参加，また，27・28日の両日，教育委員会事務局，公民館職員の応援を得た。7月31日より8月3日までの唐木調査員引率の永明小学校考古学クラブの参加は，作業能率はともかくとして，現場をにぎわし精神的な力となった。

8月に入り，中央道御射宮司遺跡発掘現場より，遣り方測量の杭，貫板の提供を受け，測量に備えて発掘区の四方に設置した。そして8月8日より確認された土坑の調査に入った。

8月13日より15日まではお盆休みとし，16日から後半の作業に入り，住居址と土坑の調査と測量が続けられた。

8月下旬，ほぼ全面の土坑を掘り上げ，土坑の調査と共に測量を実施する過程に至り，特定の土坑が一定間隔で方形に配列していることが判明した。これらは方形配置土坑として報道され，見学者が相次ぐと共に保存の声が高まった。

8月30日に茅野市郷土研究会より，市理事者に保存の陳情書が提出され，市理事者も保存の方向で現地調査を行い，その方法が検討された。

9月1日，下ノ原遺跡調査委員会は現地調査の上委員会を開催して保存することに決定した。そして方形配置土坑には山砂を入れてその部分を覆い，そのうちの一ヶ所を緑地帯とし，発掘区全面の遺構群を破壊することなく埋戻し，全体を削平することなく，土盛りした上に舗装して駐車場とするという措置が講ぜられた。9月2日から埋め戻しの作業に入り，9月8日に全作業を終了した。

3．遺跡の位置と環境

下ノ原遺跡は，長野県茅野市玉川字荒神部落の西に位置する。この一帯は八ヶ岳西山麓に展開する広大な裾野の末端部に近く，南側を上川の支流である川久保川が，北側を諏訪湖最大の流域をもつ上川が西流し，その間にはさまれた幅約600mの広い台地である。台地北部分は湧水による浸蝕で比較的起伏に富んでいるが，南部分は，西と共に川久保川に緩傾斜する地形で，平坦面は畑地として利用され，南傾斜面は土手を築いて階段状に田圃がつくられていた。

台地は二つの川が近接するにしたがって次第に狭くなり，尾根状を呈して遺跡西方650mの合流点において尽きる。

台地の北側は，永明寺山裾との間に発達する上川沖積地で，ちの地区の本町，塚原の集落が立地する。上川面と台地との比高は20mである。

川久保川の南は，浸蝕による急傾斜の一段高い長峰台地に相対する。川久保川と長峰台地の比高は15mである。

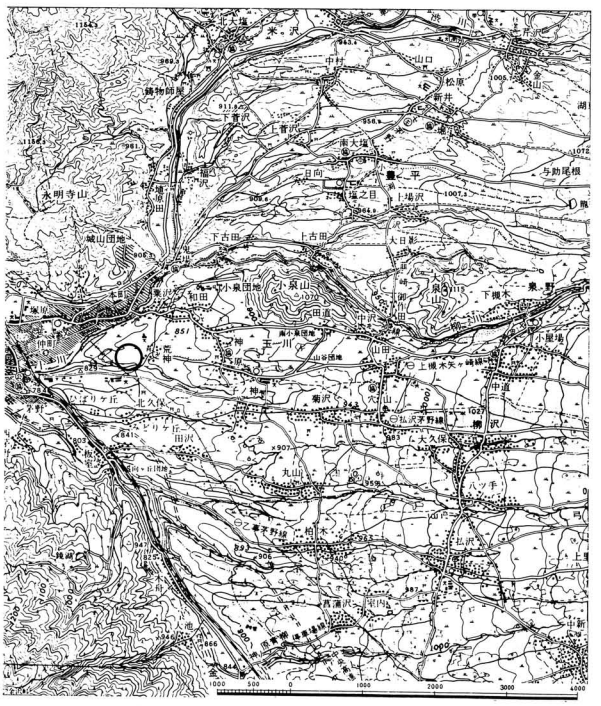
遺跡台地の南斜面は階段状の水田で，豊かな清水があり，地元の人達から薬師清水または蛇清水と呼ばれている。けだし，この清水が縄文時代の生活の根拠となったものであろう。

諏訪史第一巻（大正13年刊）によると，荒神出土として土偶が記録され，また，縄文時代の遺物発見地として，下ノ原・狐原の字名があげられている。信濃史料第一巻（昭和31年刊）には，下ノ原（狐原）として，縄文時代中期・後期の遺跡地となっている。このことから，下ノ原遺跡は古くから縄文時代の遺物発見地として知られていた。しかし，発掘調査はむろん，分布調査も行われていなかったため，その規模性格は不明の点が多かった。狐原は，下ノ原に続く西の一帯で，地形的にも遺跡地としても連続するから，下ノ原遺跡の一部として差支えないであろう。

長峰台地は，諏訪神社上社の御柱街道が通じ，縄文中期の長峰遺跡が立地する。かつて諏訪清陵高等学校地歴部による発掘が行われたが，その成果は詳でない。荒神部落の東続きには中御前遺跡があり，更に上方の続き台地には，上御前・久保川・小堂見・藤塚・山田畑・一本木・尾根田・中沢・日鴨寺の各遺跡が東4.5kmの間に点在分布する。昭和43年に緊急発掘調査した茅野和田遺跡は，荒神北東約1kmの小泉山西麓に位置する。

下ノ原遺跡の西方約400mに川久保古墳がある。この附近では川久保川の谷は次第に深くなり，やがて上川に流入し，台地もまた舌状を呈して尽きる。この舌状の尾根の突端から約170m遡った川久保川に南面する斜面中段やや上に石室が構築されていた。山林であったため下部構造は破壊をまぬがれていた。この古墳に相対する長峰台地の突端に四ツ塚古墳が，南斜面に金鍔塚古墳が位置する。また王経塚は，上川と川久保川の合流点より約300m遡った上川北岸にある。

下ノ原遺跡の北側は浅い凹地をへだてて小舌状台地が派生するが，この南斜面に小古墳があった。諏訪史第一巻に石小屋古墳とあるのがそれであろう。大正7年に発掘して糸切底の須恵器が出土したと伝えられる。戦後，ここを果樹園にするため，僅かに残っていた石も撤去されたといわれる。



第1図　遺跡位置図（○印）（1/100,000）

第2図　遺跡の立地形と発掘区（1/3,000）

4．発見された遺構と遺物

1）　第2次調査により発見された遺構と遺物

第11号住居址（2SH1住）

720cm×500cmほどの楕円形を呈するかなり大型の住居址である。壁下には小さな柱穴がめぐり，周溝はほとんど認められない。床面は堅緻であり，短軸方向に若干皿状を呈している。炉址は住居址の長軸線上にあり，傍らに埋甕をもつ石囲炉であったと思われるが，炉石は数個が撤去されている。また炉址とは別に，長軸線上に炉址と並んで焼土面が検出された。

住居址は拡張した様子が認められず，当初からのプランにあるものと思われるが，張床をした柱穴や柱穴の重複状態からすると，同一地点において数度建直しを行っているようである。また，柱穴の配置関係からみると，住居址の東南部ではさらに一基別の住居が重複しているようにも思われるが，全体に削平を受けているため床面等が把握できず，重複関係は判然としなかった。

出土した石器は打石斧27・局部磨製石斧4・尖頭器1・大型粗製石匙4・不定形な石器1・石鏃2・石錘1・石皿1・黒曜石製の剝片石器7である。

第12号住居址（2SH2住）

本址は台地の南緩斜面に位置している。このため住居址の北壁は深いが南側床面や壁は流出しており，プランは浅く残存する柱穴によって推定した。それによると，本址はほぼ500cm×500cmの円形プランの住居址である。壁下には周溝が認められないが，床面には4列の周溝が認められる。本址以外の住居の周溝もあるが，床面の流出等により前後関係やプラン等が判然としないため，一括して第12号住居址として扱った。炉は中央に石囲炉が設けられており，炉石は数個撤去されている。本址西北部には第20号址（2SH8住）が本址の上に張床をして重複する。

出土した石器は打石斧9・磨石斧1・不定形な石器1・石鏃3・敲石1・凹石2・黒曜石の剝片石器1・原石2であった。床面から出土した1/3個体ほどの土器や炉の形からみて，本址は藤内期の住居址とみられる。

第13号住居址（2SH3住）

本址は第14・15・19・20号址（2SH4・5・9・10号住）と共に発掘区東北部の一段高い部分に位置している。この部分は全体に削平されているため壁は認められず，また床面も良好でない。さらに住居址の西側は一段低く削平されている。

住居址は580cm×580cmほどの円形を呈するものと思われる。炉址は中央やや北西へ寄った長軸線上にある。中央部には深鉢形土器を埋設しており，炉石はすべて撤去されている。また長軸線上の中央部には張床面の焼けている部分がある。さらに長軸線上の出入口部に相当する部分のピット内には完形の深鉢形土器が正位に埋置されていた。初期の埋甕習俗と関わるものであろうか。周溝は南側で明瞭に検出され，第20号住居の炉址を破壊している。住居中央部の西と東にはそれぞれ小竪穴が1基存在する。西側の第20号小竪穴（2SH5号小竪穴）は本址に伴うものとみられるが，東側の小竪穴は攪乱溝により上部が破壊されているため，その帰属は明らかにし得なかった。

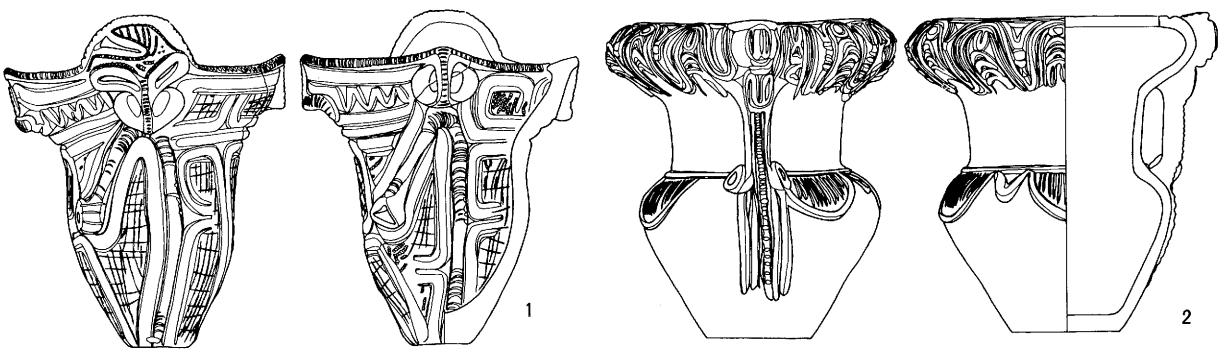
出土した石器は打石斧9・大型粗製石匙1・横刃形石器2・石錘1・凹石1などがある。

第14号住居址（2SH4住）

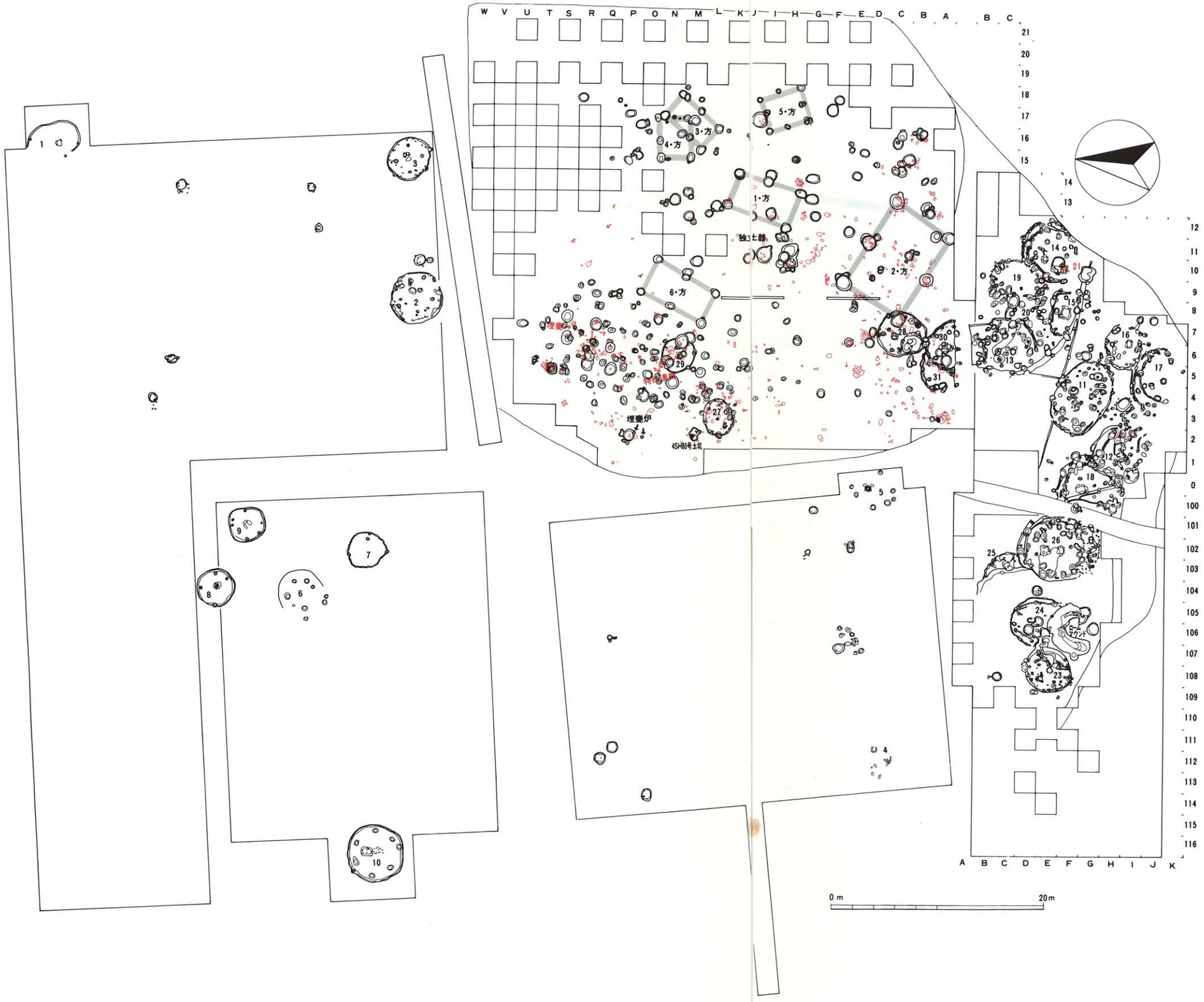
第2次調査区の東の隅に発見された住居址であり，東南部の一部分は農道下のため調査できなかった。また南側は全体にロームが削られているため床面は検出されなかった。本址は同一地点で2基が重複した住居址であり，また西北部には第19号住居址の一部が重複する。

旧住居址は540cm×480cmほどの円形プランの住居址と考えられ，主柱穴は深さ40cm代の比較的径の小さなものが相当すると思われる。炉址は柱穴に切られている焼土面の部分が相当するのだろう。

新住居址は540cm×540cmほどの円形プランの石囲炉址を有する住居址である。主柱穴は旧住居のものより深く径の大きいものが相当しよう。炉址内には焼土が認められず，床面に焼土面が2ヶ所認められた。炉址の南に



第3図　第11号住居址床面出土の小型土器（1・1/3）・第13号住居址出入口部ピット内埋置土器（2・1/6）



第4図　下ノ原遺跡遺構全図（1/400）

は第18号小竪穴（2SH1号小竪穴）が設けられているが，本址よりも後出のものであろう。

遺物は打石斧7・大型粗製石匙2・横刃形石器2・石鏃3・凹石3・石皿1等であり，土器は破片が僅かに出土したのみであった。

第15号住居址（2SH5住）

本址は南半分ほどが削平されているものの，削平部に残存する柱穴等からみて，480cm×480cmほどの隅丸方形を呈する住居址であると思われる。炉址は100cm×120cmほどの大きな掘り方からなる炉址であり，炉石はいくつかが撤去されている。炉址と北壁間には上面に礫を配した深さ20cmほどの浅いピットが設けられている。また炉址の南には小礫を蔵した第22号小竪穴（2SH7号小竪穴）が設けられている。本址に伴う小竪穴と考えられる。

本址は出土した土器からみて曽利Ⅲ～Ⅳ式期の住居址である。出土した石器は打石斧3・大型粗製石匙1であった。

第16号住居址（2SH6住）

本址は，地形が平坦な部分から緩傾斜する部分への移行部に構築され曽利Ⅲ～Ⅳ式期の住居址である。

住居址の南西部は第17号址（2SH7住）と重複している。このため床は張床がなされていたと思われるがほとんど検出できなかった。したがって住居址の南側範囲は埋甕と柱穴によって推定した。それによると，本址は440cm×440cmほどの円形プランの住居址である。炉址は石囲炉であり，中央やや南に寄った位置に設けられている。また炉址の北側には焼土がみられる。埋甕は2体ある。外側のものは胴上部を逆位に埋設し，内側のものは口縁部と胴下半部を欠損したものを正位に埋設している。

出土石器は打石斧7・横刃形石器1・石鏃1・凹石4・磨石1・黒曜石の剝片石器2である。

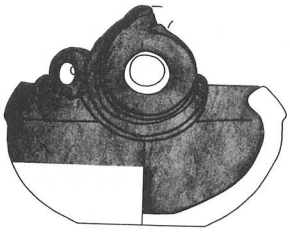
第17号住居址（2SH7住）

本址は緩傾斜面に構築された住居址であるため南側半分ほどの床面は既に流出しており，また柱穴も検出し得ない部分もあった。住居址は同一地点で2基が同心円状に重複している。

旧住居址は620cm×460cmほどの楕円形を呈するものと思われる。出土遺物は石皿1・斜刃磨石斧1であり，小型の丹彩土器が床面より，深鉢形土器の胴下半部が覆土より出土した。

新住居址は中央に石囲炉址を有する円形プランの住居址である。遺物の量は比較的多く，吹

上パターン現象をとっていた。遺物のうち石器は打石斧13・局部磨石斧1・磨石斧1・大型粗製石匙2・石鏃4・敲打器1・凹石1・磨石2などである。



第5図 旧住居址出土小型丹彩土器(1/3)

第18号住居址（2SH8住）

住居址の西側部分は水路とローム面の削平のため破壊され，わずかに柱穴のみが残存する。また東南部には第12号住居址が下位に重複し，東壁の一部は第26号小竪穴（2SH11号小竪穴）を切り込んでいる。

本址は640cm×560cmほどの円形プランの住居址である。住居址は一度北東部へ拡張したようであり，南側は同一地点での柱穴の建直しが数度行われている。炉址は

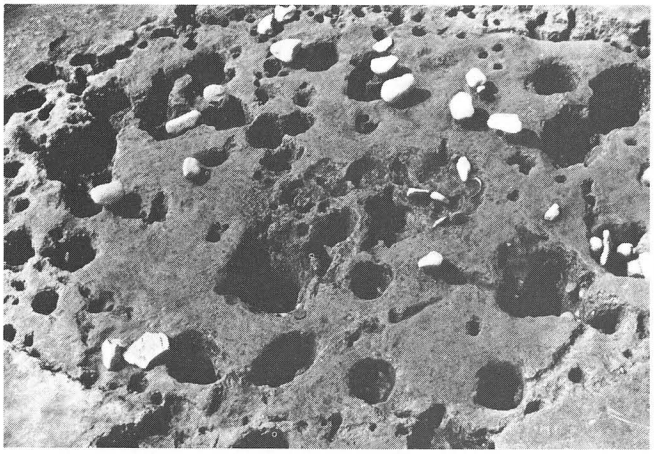


写真2 第11号住居址

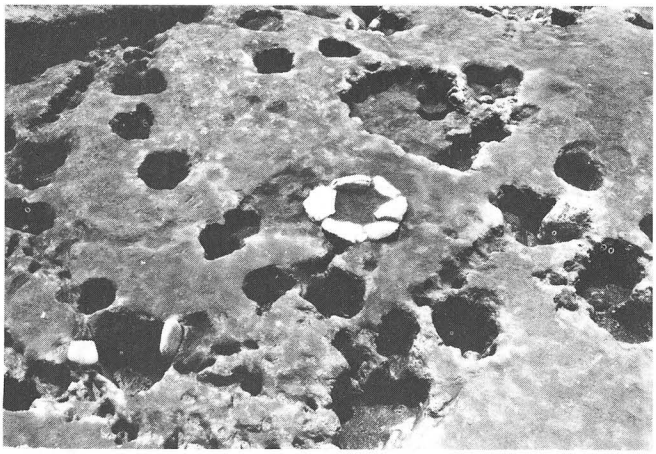


写真5 第14号住居址

写真3 第12号住居址

写真6 第15号住居址

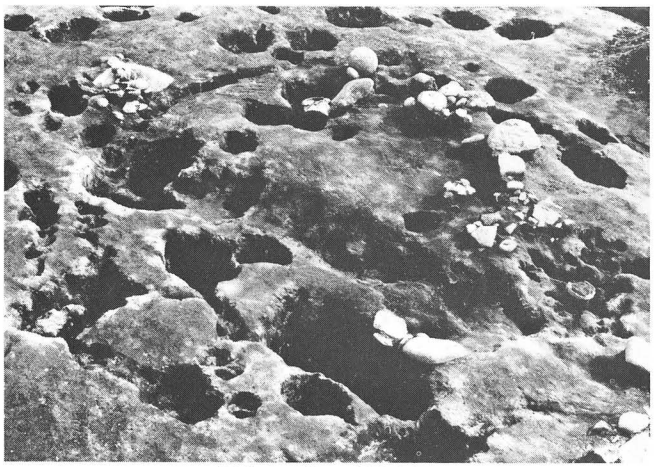


写真4 第13号住居址

写真7 第16号住居址

石囲炉址であり，北側の炉石が撤去されている。炉址上には長さ53cmの流紋岩製の火熱を受けたとみられる無頭石棒が東南部を向いて遺存しており，その延長線上の床面には完形の浅鉢が正位の状態に遺存していた。

出土した石器は打石斧8・大型粗製石匙4・横刃形石器3・石鏃1・石錐1・石棒1である。

第19号住居址（2SH9住）

本址は全体にローム面が削平を受けているため，炉址や床面等は検出されなかった。

住居址は440cm×560cmほどの円形プランと考えられる。西側には第20号住居址，東南部では第14号住居址と重複しており，また第17号小竪穴（2SH2号小竪穴）も掘り込まれている。本址と以上の遺構との前後関係は，ロームが削平されていることもあり判然としなかった。

第20号住居址（2SH10住）

本址は西北部で第13号住居址，東側で第19号住居址と第17号小竪穴，南側で第15号住居址とそれぞれ重複している。壁は北壁の一部が検出され，床面も炉址と北壁間にわずかに認められる程度であった。

住居址は440cm×440cmほどの円形プランを呈するものと思われる。炉址はほぼ中央部にあり，第13号址（2SH3住）の周溝によって壊され，わずかに焼土と炉石が残存するのみである。炉址上に遺存した一括土器からみて，本址は新道式期の住居址である。

第21号住居址（2SH11住）

第18号小竪穴（2SH3号小竪穴）の上位に発見された石組炉をもって本址とした。発見されたのは石組炉のみであったが，発掘時にも鉄平石が数枚出土したことから，本址は敷石住居址であった可能性が強い。石組炉内には無文粗製土器の底部が遺存していた。

第22号住居址（2SH12住）

第12号住居址（2SH2住）の発掘を進めて行く過程で第12号址の東壁上に発見された石囲炉址をもって本址とした。炉石は東側と南側がなく，石囲の中には後期の粗製土器の底部が焼土と共に遺存していた。周辺には敷石等の施設は認められなかった。

第23号住居址（3SH1住）

本址は第2次調査区の西端に位置しており，東壁の一部が第24号址（3SH2住）と重複する。

住居址は440cm×420cmの略円形プランであり，中央に石囲炉址を有する。炉址内には深鉢形土器が直立して遺存し，さらに別の一個体を破片にし，直立する深鉢形

写真9　第18号住居址

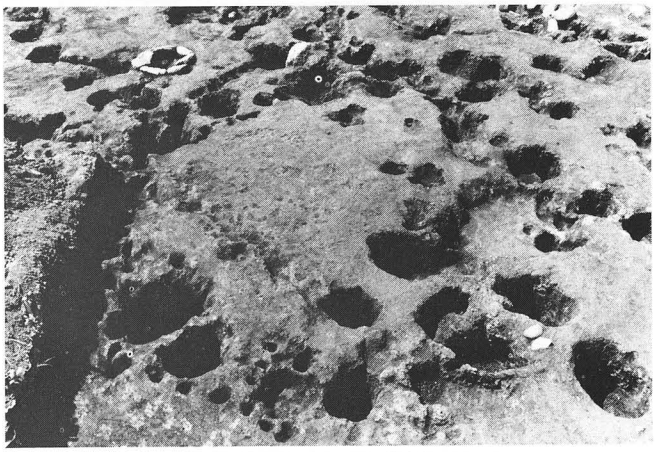


写真10　第19号住居址

写真8　第17号住居址

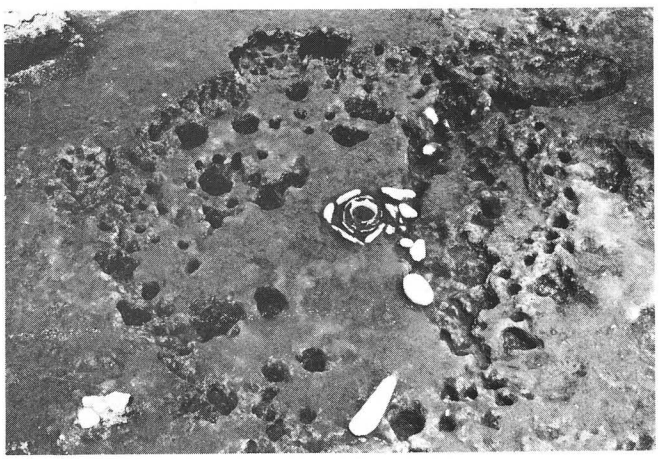


写真11　第23号住居址

土器のまわりを取り巻いていた（裏表紙土器実測図）。炉址内には焼土がまったくみられない。周溝はなく，奥壁中には柱穴とは異なる竪穴が設けられている。床面は堅緻であるが，炉址より東側は攪乱溝により破壊されている。

出土した遺物のうち石器は打石斧4・横刃形石器3・石鏃1・敲打器1・凹石1である。

第24号住居址（3SH2住）

本址は住居址の南側1/2ほどがローム マウンドによって大きく切り取られている。西側では第23号住居址（3SH1住）の一部分と第33・34号小竪穴（3SH7・6号小小竪穴）と重複している。共に本址に先行する時期の遺構であり，また住居址中央部に設けられている第31・32号小竪穴（3SH5・6号小竪穴）も同様である。

第6図　第24号住居址出土顔面把手（1/2）

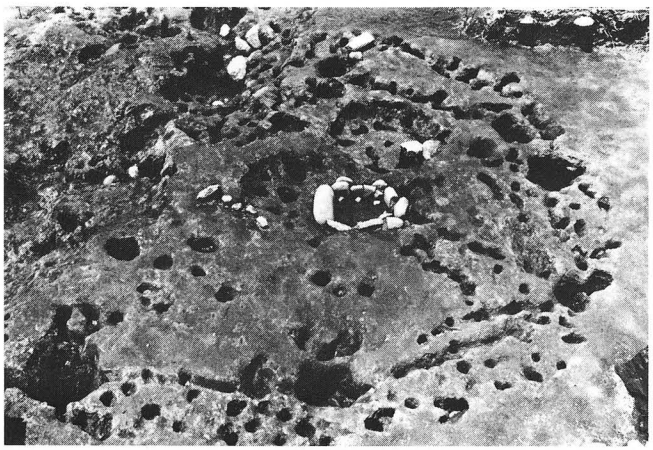


写真12　第24号住居址

住居址の平面形は楕円形を呈するものと思われ，中央やや北寄りの位置に小礫を重ねた石囲炉が設けられている。床面は堅緻である。周溝は北西部の壁の検出されない部分に認められた他，東側と北西部に壁より離れた内側に発見された。土器は炉址を中心に床面より多く出土し，一括して出土した土器群は4個体がほぼ完形に復元された。また北東壁寄りの周溝上からは顔面把手が出土した。石器は打石斧4・横刃形石器3・不定形石器1・石鏃1・凹石1である。

第25号住居址（3SH3住）

住居址の2/3ほどが削奪されており，また南側は第26号址（3SH4住）に切り込まれている。

床面は軟弱であり，周溝のみ明確に検出された。第26号址の新旧両住居址に切り込まれていることから，藤内Ⅰ式期以前の住居址と考えられる。

第26号住居址（3SH4住）

本址は同一地点において2基が重複した住居址である。住居址の北東部には壁様の立ち上がりが3段認められるが，中段のものは第18号住居址（2SH8住）の西側を削平し造られた立ち上がりと同様のものに思われた。

旧住居址は640cm×640cmほどの略円形プランの住居址であると考えられる。新住居址の東側で重複する柱穴内より藤内Ⅰ式の半完形土器が出土している。

新住居址は旧住居址よりも若干南にずれて重複している。住居址の南側はローム面から浅いため，壁や床面は明確には検出されなかった。住居址の規模は720cm×600cmほどで，平面形は楕円形を呈している。中央には石囲炉址があり，炉址内には井戸尻式期の大型深鉢形土器の大破片が敷かれていた。床面は堅緻であるが炉址の西北部は攪乱されている。周溝はほとんど認められなかった。柱穴は旧住居址との関係から張床のなされたものもあったが，多くは旧住居址のものと区別が難しい状態で検出された。また南西壁に近い柱穴内からは，藤内Ⅱ式頃の深鉢形土器2個体と浅鉢1個体がまとまって出土した。

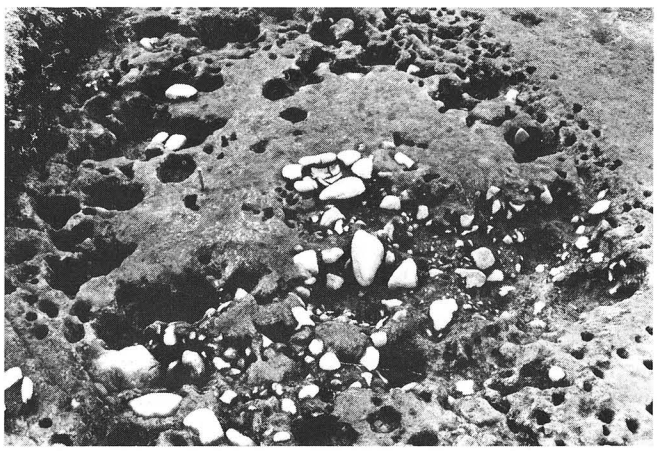
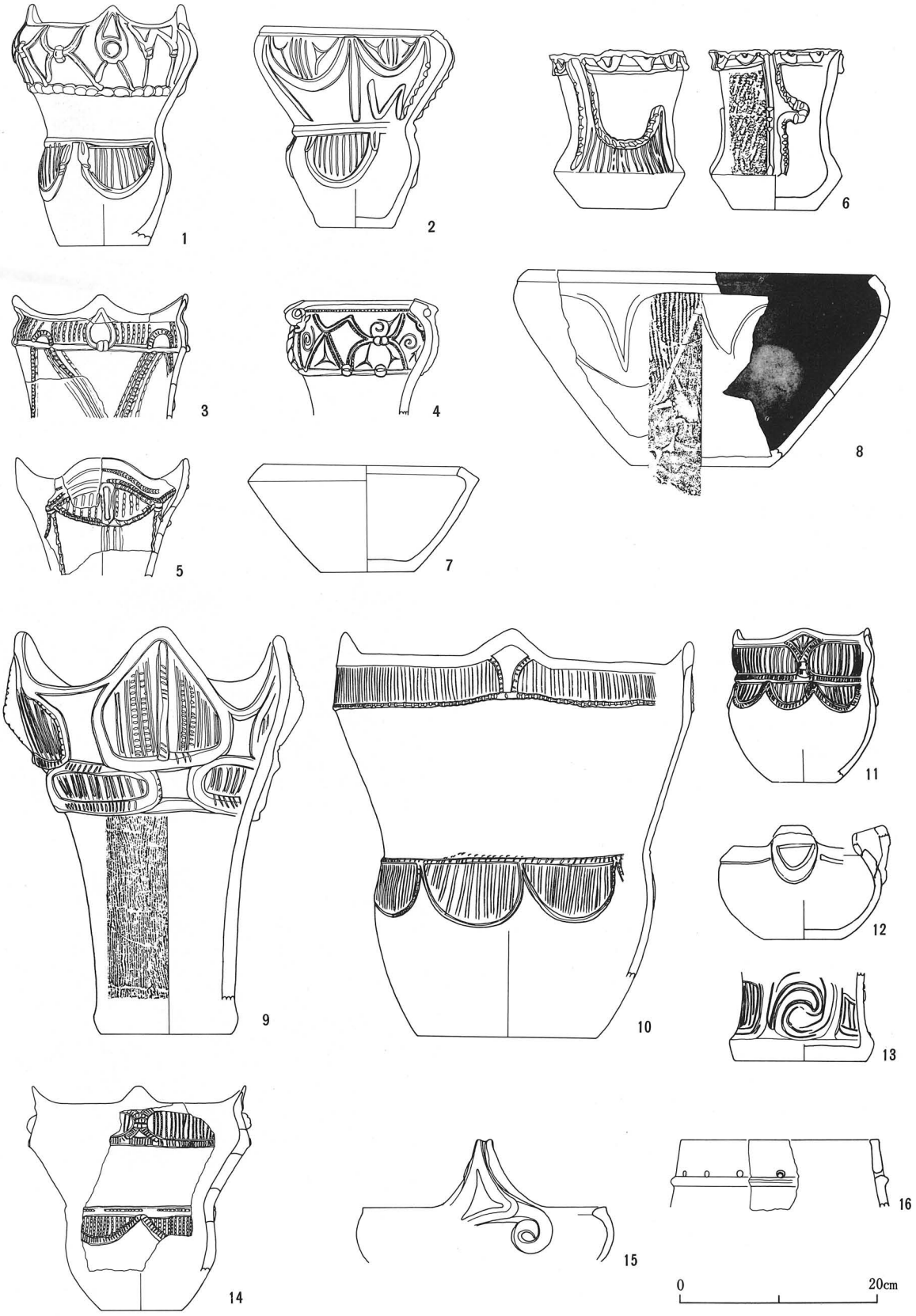


写真13　第26号住居址

小竪穴

小竪穴は19基発見された。このうち住居址内の施設とみられる小竪穴は第13号住居址（2SH3住）内の第16号小竪穴（2SH1号小竪穴），第15号住居址（2SH5住）内の第22号小竪穴（2SH7号小竪穴）である。また，攪乱のため共伴の正否には明確さを欠くが，第13号住居址内の第20号小竪穴（2SH5号小竪穴）も住居内施設である可能性も考えられる。

屋外の小竪穴は小さな壁柱穴や柱穴状の施設を伴っていることから，何らかの上屋が構架されていたことを思わせるものが多い。また，第24・26・30号小竪穴（2SH9・11・3SH4号小竪穴）は底面に数個の礫を遺存している。以上の屋外の小竪穴はほとんどが貯蔵穴と考えられ，形態も相互に類似している。しかし第19号小竪穴



第7図　第18号住居址出土土器（1～8）・第24号住居址出土土器（9～16）：(1/6)

（2SH4号小竪穴）は上記小竪穴の共通性からは逸脱しており，異なる性格の想定される小竪穴である。

各小竪穴共に出土遺物はほとんどみられなかった。ただその中にあって，第13号住居址内の第20号小竪穴は，床面近くに完形土器一個体が数個の人頭大の礫及び焼土塊と共に遺存しており，その出土状態が注意された。

ロームマウンド

第24号住居址の南側と第29号小竪穴（3SH3号小竪穴）の北西部を削奪した形で発見された。黒色土の落ち込みの規模が大きく，北側ではかなり深い。中央部には二次堆積によるロームが南側から半島状に突出している。遺物もあり，中期から後期の土器を出土した。

2）第3次調査により発見された遺構と遺物

第27号住居址（4SH1住）

360cm×280cmの規模を有する平面形が楕円形を呈した比較的小型の住居址である。周溝はなく，床は断面形が皿状を呈している。中央には小ピットが穿たれており，僅かに焼土が残っている。本址は中期初頭の住居址である。

第28号住居址（4SH2住）

本址は460cm×440cmの規模で不整円形を呈する住居址である。住居址内には4SH第199号土坑と4SH第184号土坑が後に掘り込まれている。床面は堅緻であり周溝はない。炉址は中央やや北寄りに石囲炉が設けられている。炉石は取り外されたものもあり，そのうち2個が炉内に遺存していた。出土遺物の量は多く，特に南西部の柱穴脇の床面から完形土器が2個体並んで出土した。

第29号住居址（4SH3住）

本址は340cm×300cmの平面形が楕円形を呈する比較的小型の住居址である。本址の北部分には4SH第145号・146号土坑が，また東には4SH第100号・101号土坑が後の時期に掘り込まれている。住居址はローム面からの掘り込みが浅く，壁の判然としない部分もある。床面は堅緻であり周溝はない。炉址は埋甕炉であり，4SH第102号土坑によって1/2ほどが切り取られている。出土遺物は少なく，数点の小土器片の他に打石斧と凹石が各一点出土した。中期中葉前半初頭の住居址である。

第30号住居址（4SH4住）

本址は第2次調査時に住居址の南側一部が用水溝と共に発見されていた。この用水溝は住居址を分断する形に東西方向にはしっている。

住居址は600cm×500cmの楕円形を呈し，第31号址（4SH5住）の東側に重複して構築されている。炉址は中央やや北寄りの位置で，第31号住居址の柱穴上に設けられている。炉址の西側には礫と焼土塊を出土した4SH第202号土坑がある。住居址内からの出土遺物は比較的少なかった。

第31号住居址（4SH5住）

本址は東側を第30号住居址（4SH4住）によって切られ，また南側は用水溝によって破壊されている。壁は検出されず，周溝・床面は北側で認められた程度である。南側では僅かに焼土面が2ヶ所発見されたのみであった。

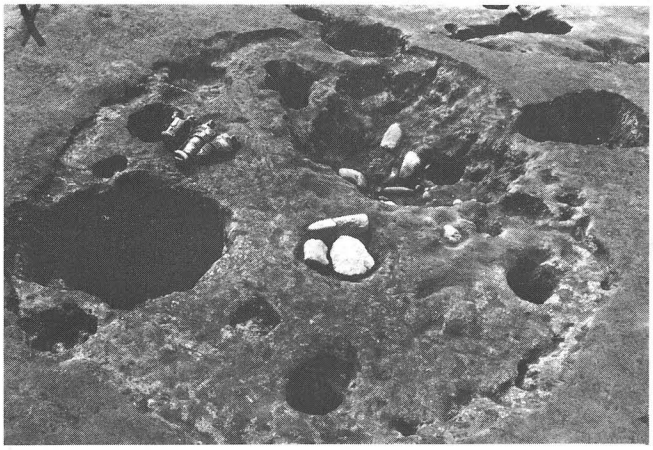


写真14　第28号住居址

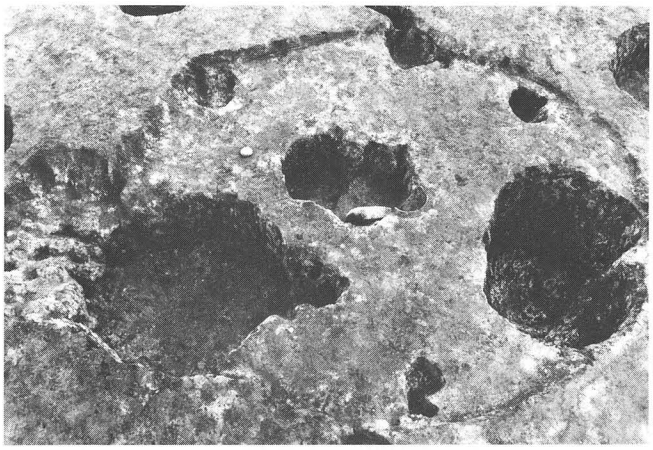


写真15　第29号住居址

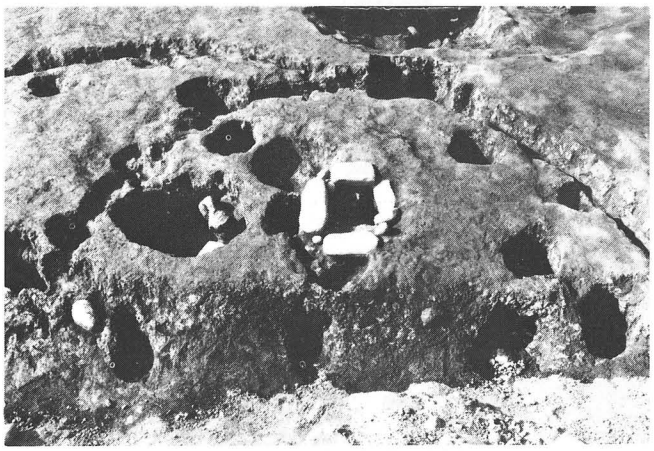
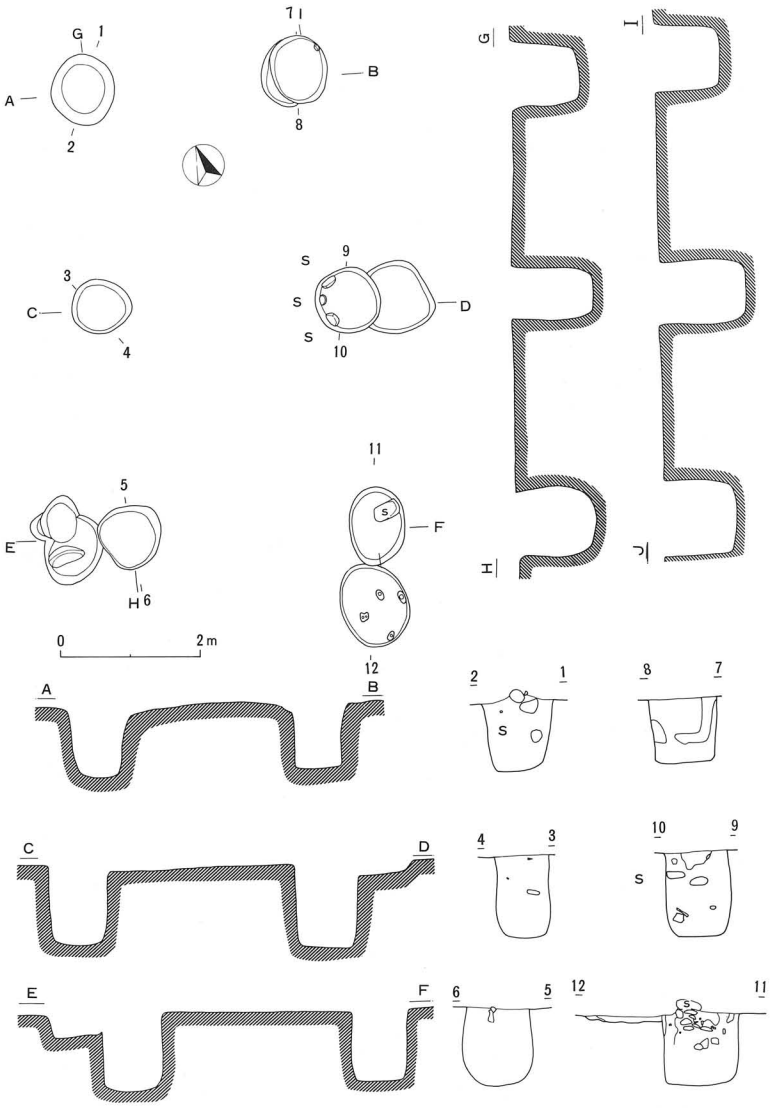


写真16　第30号住居址

第1号方形配置土坑

土坑中心間の長辺は650cm・短辺は350cmほどある。各土坑の平面形は90cm×90cmのほぼ円形であり，4SH30号土坑のみ楕円形である。深さは100～120cmほどあ



第8図　第1号方形配置土坑（1/100）

り，壁はほとんど直壁であり，袋状をなすものと斜壁のものもある。土坑内の覆土は自然堆積を思わせるものではなく，礫を多く含む土坑もある。各土坑内より出土した土器は堀ノ内Ⅰ式土器であった。

第2号方形配置土坑

長辺920cm・短辺630cmで，発見されたものの中では最大の規模である。また各土坑の規模も大きく，口径は130cm×130cmほどの略円形を呈しており，深さも120cm～140cmほどある。各土坑の覆土は自然堆積を示す状態には観察されなかった。このことは，土坑上面の集石のあり方と共に，土坑内に詰められた状態で出土した多量の礫のあり方によっても判断された。各土坑内から出土した土器の最も新しい型式は堀ノ内Ⅰ式であった。なお，4SH第50号土坑内からは土製円板が一点出土した。

第3号方形配置土坑

発掘区東側は全体にローム面の削平を受けているためか各土坑の深さも比較的浅い。第3号方形配置を構成する各土坑も比較的浅く，深さは50cm前後である。各土坑の平面形は80cm×80cmほどの円形プランであり，東側の4SH11号土坑のみ楕円形プランである。方形配置の長辺は480cm・短辺280cm，長辺の土坑間は240cmであり，第4号方形配置のプランと重複した関係にある。このことは，本配置遺構の北角に位置する4SH6号土坑が，僅かであるが第4号方形配置の4SH5号土坑に切り込まれている事実からも明らかであった。各土坑内からは縄文時代後期とみられる土器片が出土しており，型式判定の下せる資料は4SH15号土坑内から堀ノ内Ⅰ式土器と加曽利BⅠ式土器が出土している。このことから，本址は加曽利BⅠ式期に位置するものと言えるだろう。

第4号方形配置土坑

方形配置を構成する各土坑は70cm×70cmほどの円形や楕円形を呈しており，深さは60cm前後ある。長辺370cm・短辺は280cmほどあり，北側長辺中の4SH9号土坑が若干西へ寄っている。各土坑のうち3ヶ所の土坑内から型式判定の難しい縄文時代後期とみられる無文の土器片が出土している。また，加曽利BⅠ式期とみられる第3号方形配置を構成する4SH6号土坑を本遺構の4SH5号土坑がその一部に切り込んでいることから，本遺構は第3号よりも後出の遺構であることは明らかである。

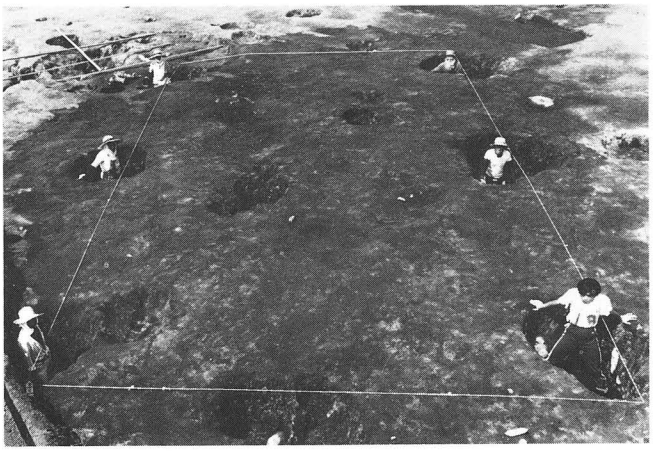


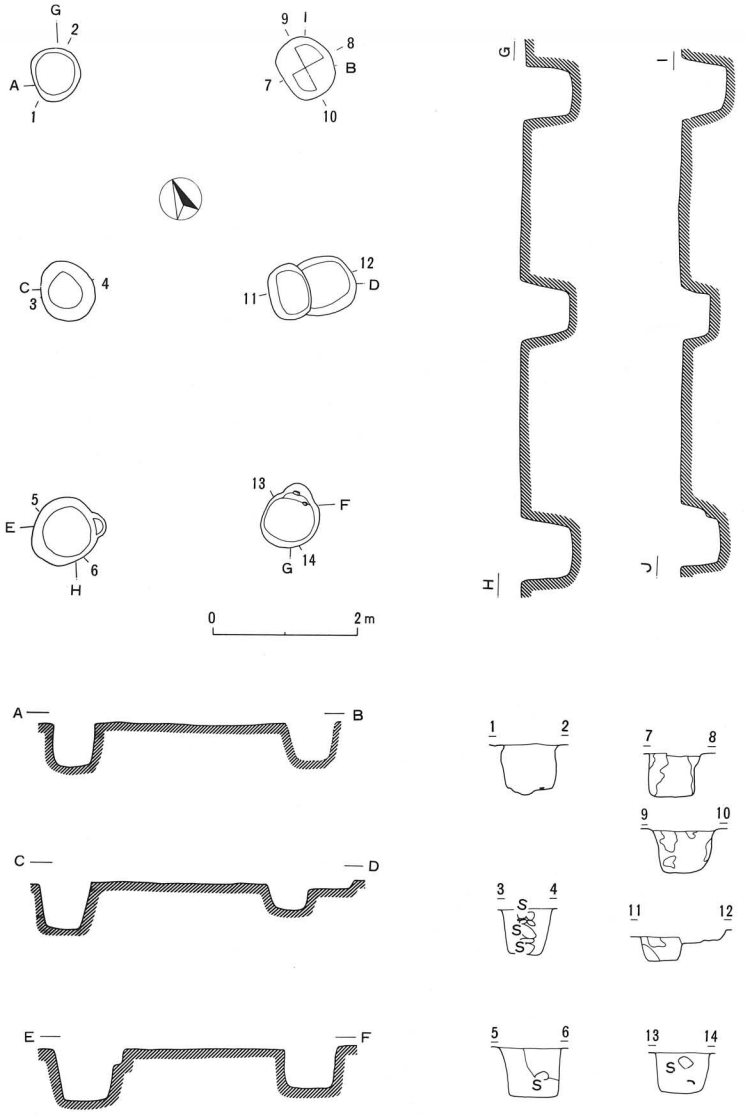
写真17　第2号方形配置土坑

第5号方形配置土坑

第5号方形配置土坑は短辺中央部にも土坑を有する。各土坑は約44cm×44cmほどの円形を呈する小型なものであり，深さも40cm前後と浅い。長辺は400cm・短辺は320cmほどあり，東側長辺中央部のピットは若干東へ寄った位置にある。また，短辺中央部の土坑も両者共に若干内側に寄って位置しており，共に2回掘り替えられている。方形配置南角の4SH27号土坑も同一地点において3回掘り替えられている。各土坑からの出土遺物はごく僅かではあるが4SH27号・63号土坑から加曽利ＢⅠ式土器が出土している。また，北側短辺中央部の4SH26号土坑がやはり加曽利ＢⅠ式期の4SH25号土坑に切られていることから判断して，本址は加曽利ＢⅠ式期の遺構であると言えよう。

第6号方形配置土坑

各土坑の平面形は80cm×80cmほどの円形を呈しており，深さは約60cm前後ある。長辺630cm・短辺330cmであり，長辺の土坑間は310cm～320cmほどある。第1号方形配置とほぼ似た大きさにあるものの，各土坑の深さは1号のそれよりも浅い。各土坑の覆土の状態は自然堆積を思わせるものではなく，4SH98号土坑においては礫を詰め込んでいる。4SH205号土坑は特に柱穴痕の存在を想定して発掘を進めたが，柱穴痕は確認できなかった。6個所の土坑のうち3ヶ所の土坑内から出土した土器は堀ノ内Ⅰ式土器であった。このことから，本址も1号・2号と同様に堀ノ内Ⅰ式期の遺構であると言えるだろう。



第9図　第6号方形配置土坑（1/100）

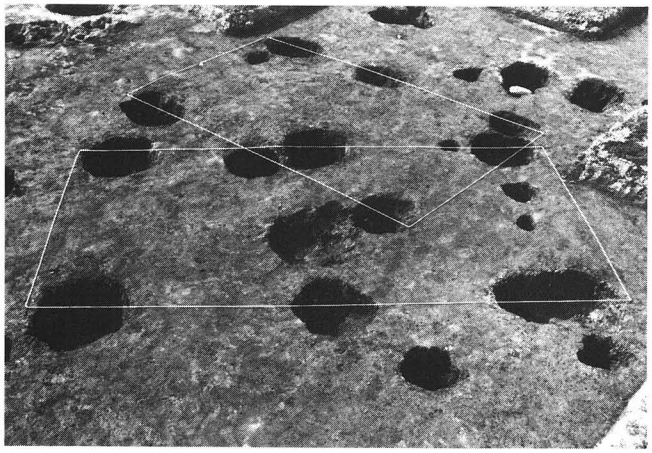


写真18　第3号・第4号方形配置土坑

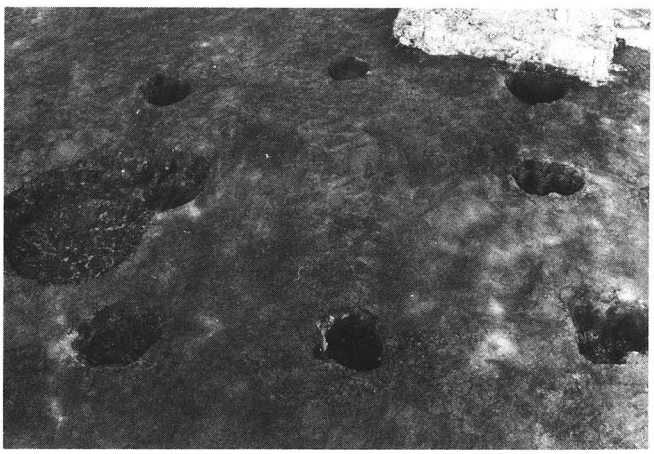


写真19　第5号方形配置土坑

土坑

2次調査までは小竪穴として扱ったが，今回は柱穴状のものも含め土坑として扱った。このため小竪穴とは別に土坑としての番号が新たに生じている。また土坑の番号はローム面での確認時において付したため，その後の調査によって柱穴として判明したものなどがあり，実際には欠番としなくてはならないものもある。現在整理途上であるため，正報告をもって整理訂正したいと思う。

発見された土坑は前期・中期・後期のもの208基であり，なかでも前期末と後期初頭の土坑が多い。前期末の土坑は発掘区東南部に集中しているようであり，後期のものは北西部に集中しながらもほぼ全体に散在している。

前期末の土坑は平面形が円形か楕円形であり比較的浅いのが特徴である。断面形は多くがタライ状を呈しており，底面に小ピットを有するものもある。遺物も少なく，僅かに土器片等の出土する土坑が多いが，4SH51土坑と189土坑からは復元可能な深鉢形土器が出土している。

後期の土坑は大型なものから柱穴状の小型なものまでいくつかの類型がある。覆土の状態にも一時的な埋没状態を示すものと自然堆積の状態を示すものとがあり，また，土坑上面に蜂巣石等を伴う集石をもつものや覆土にかなり多量の礫を有するもの，底面に偏平な礫を有するものなどがある。遺物がまとまって出土した土坑は多くはないが，深鉢形土器の大破片を出土する土坑がある。

また，4SH80号土坑は，浅い方形の掘り方の西壁から底面にかけての部分に完形の深鉢形土器が伏せた状態で出土しており，先の例とも合わせ注意される。

集石

集石は発掘区の西側と南側を中心とした黒褐色土から褐色土中に設けられており，ほぼ全域を覆っている。平面的にみれば西側と南側の2つの大きなブロックに分別されるようであり，西側のものは後期の土坑群の分布と重なる。南側は第2号方形配置を構成する土坑上面の集石を中心にその北側と西側に散在している。これらの集石のうち核となる集石は，その下位に下部施設と考えられる土坑を有するものと，まったく下部施設をもたないものとの二類型がある。しかし集石自体については両者の間にそれほどの違いはない。以上の集石は縄文時代後期の所産と考えられ，特に西側の集石内からは石棒・石皿・蜂ノ巣石・土偶・耳栓・小型土器等が出土し，祭祀的な性格の強い遺構であることを物語っていた。

特殊遺構

N—5を中心に，黄褐色の漸移層からローム上面にかけて発見された集石様の特殊な遺構である。遺構は10点ほどの礫と2点の石棒，1点の凹石と深鉢形土器の胴上部からなり，若干西へ離れた位置に石棒が一点遺存していた。遺構上面は焼土で覆われ，焼土内からはかなりの量のクルミ，クリ，トチなどの炭化物，それに骨片と思われる白色の小粒子も若干出土した。また焼土上の褐色土中には集石があり，この集石から東南部へ僅かに離れた集石内からは土偶の右脚部が出土した。

埋甕炉

O—2·P—2グリッドに並んで発見された前期末の遺構である。周辺からは同型式の多量の下島式土器が出土したが，住居址としては把握できなかった。

O—2埋甕炉は胴上部を埋設し周辺には焼土を伴っている。土器内には川砂を詰め，上面には同一個体の胴下半部の破片3点があたかも蓋をした様な形に遺存していた。また炉体土器の底部は隣のグリッドより出土し，この三者は接合復元の結果完形となった（写真22の1）。

P—2の埋甕炉は，それほど時間差がないものとみられる4SH186号土坑の埋没後に，土坑の南壁部に設けられている。186号土坑は底面に大きな炭化材が3本並列して遺存し，上部には多量の礫が詰め込まれており，壁は火熱により赤変していた。埋甕炉はこの186号土坑の壁のローム面と同レベルの覆土上部に位置しているため，土坑の内側へ落ち込んだ様に傾斜した状態で出土した。土器は深鉢形土器の口縁部を欠く胴上部である。

写真20　第80号土坑

写真21　特殊遺構

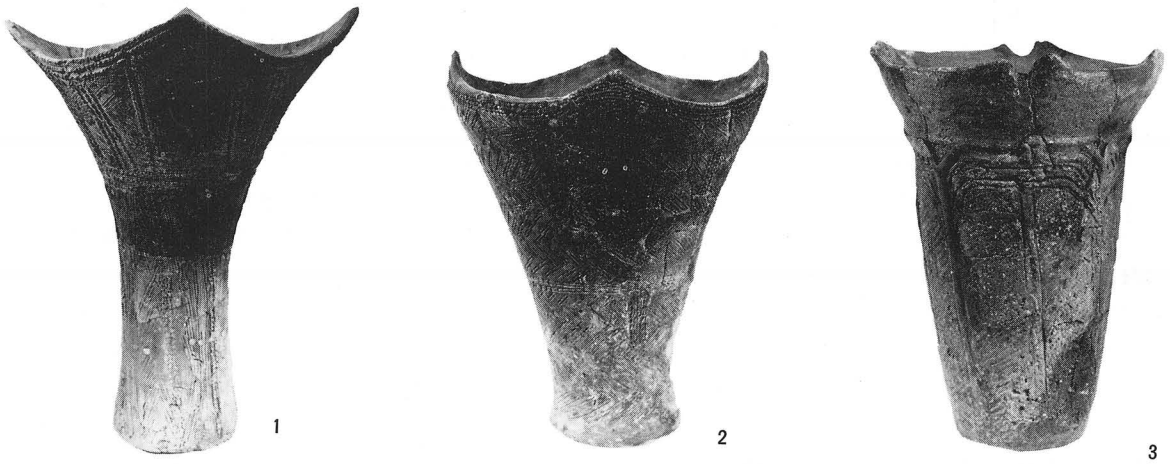


写真 22　第 3 次

5．まとめ

下ノ原遺跡は,第 1 次・2 次・3 次調査をとおし，おおよそ遺跡の西側と北側を調査したことになる。第 2 次・3 次調査による遺構の分布状態からみると，遺跡はさらに地形にそって南側を主体に東上方て延びているものと予測されるのであり，この部分についても将来的には調査をする必要があると言えるだろう。

ここではいくつかの調査成果のうち，最も数多くの遺構と遺物を出土した縄文時代中期と後期の下ノ原遺跡について述べ，近い将来予定されるはずの正報告への指針としたい。

縄文時代中期　縄文時代中期の住居址は 26 基発掘された。その内訳は中期初頭 1・中期中葉 23・中期後葉 2 であった。このうち殊に注目されるのは中期中葉期の集落である。

集落は台地南側の住居群と北側の住居群，それに両者の中間部に位置する住居の構築されない部分といった空間構成をとり，総じて馬蹄形集落の形態にある。

八ヶ岳山麓の縄文中期の集落が馬蹄形を呈する集落構成にあることは早くから注目されていたところであるが，その具体的な姿や内容が明らかにされた例は極めて少なく，その社会構造もまた不鮮明である。先にも述べたが，下ノ原遺跡は全体として馬蹄形を呈する集落遺跡であり，それぞれの空間構成の中で住居群は北群と南群とに分れている。また，南群は住居址の重複や建直しが殊に著しい。このような現象が何故南群にのみ顕著なのか，しかも比較的短期間の内にこのような事実が繰り返されたようであり，住居の群別と合わせ，以上の点は馬蹄形集落の意義を解明する上に重要な問題を投じているものと言える。

また，中期後半の隣り合う 2 軒の住居址の存在も重要である。

我々は発掘に着手するにあたって，下ノ原遺跡では同期の住居址が少なくとも 10 軒前後は発見されるものと予測していた。それは，八ヶ岳西山麓の同時代の遺跡のあり方と台地の規模から判断してのことであった。しかし我々の予測に反した集落規模のあり方は，周辺遺跡のあり方と共に，あらためて遺跡間の関係を考えさせるものとなった。

縄文時代後期　八ヶ岳山麓は，縄文時代中期末以来遺跡は減少し，後期の遺跡数は中期のそれの約 1/6 ほどにまで減ってしまう。こうした現象は重大な歴史的背景によるものであり，このことは学界の最大の関心事の一つとなっている。

下ノ原遺跡の約 200 基ほどの後期の土坑群と，それに八ヶ岳山麓では未発見であり，勿論全国的にみても確実な例にとぼしい方形配置土坑の発見は，以上の重大な問題を解明して行く上に貴重な資料を提供することになった。

「縄文のふるさと」とまでに表現される八ヶ岳西南麓において，下ノ原遺跡の調査による成果は実に多大であった。概報の関係上その成果はごく一部しか報告できないが，既に記述してきたとおり，下ノ原遺跡の調査と成果は多方面におよぶ重要ないくつかの課題に貴重な資料を提示することになった。1 日も早く正報告が準備されることをねがうものである。

4

5

6

調査区出土土器（1/6）

第２次調査委員会

委員長　小川由加里（文化財審議委員長）
副委員長　小平善幸（教育委員長）
委　員　吉田幸男（市議会社会文教委員長）
〃　宮沢　伝（文化財審議副委員長）
〃　小平実人（文化財審議委員）
〃　今井すみ江　〃
〃　茅野慶次　〃
〃　矢嶋　斎　〃
〃　矢崎孟伯　〃
〃　木川千年（教育長）
〃　両角　甲（都市計画課長）
〃　樋口義久（財政課長）

事務局　事務局長　木川千年（教育長）・次長　上原　寛（教育次長）・係長　矢崎久治（社会教育係長）・係　長田　篤・戸田外史・小口秀孝・山岸美佐子（社会教育係）
調査員　宮坂虎次・鵜飼幸雄（尖石考古館）

第３次調査委員会

委員長　小川由加里（文化財審議委員長）
副委員長　三浦邦次（教育委員長）
委　員　矢崎　武（市議会社会文教委員長）
〃　宮沢　伝（文化財審議副委員長）
〃　小平実人（文化財審議委員）
〃　今井すみ江　〃
〃　茅野慶次　〃
〃　矢嶋　斎　〃
〃　矢崎孟伯　〃
〃　長田太郎　〃
〃　大久保善立　〃
〃　木川千年（教育長）
〃　矢島雅幸（社会教育課長）
〃　寺島博夫（都市計画課長）
〃　牛尼忠幸（財政課長）
会計監事　宮沢　伝・牛尼忠幸

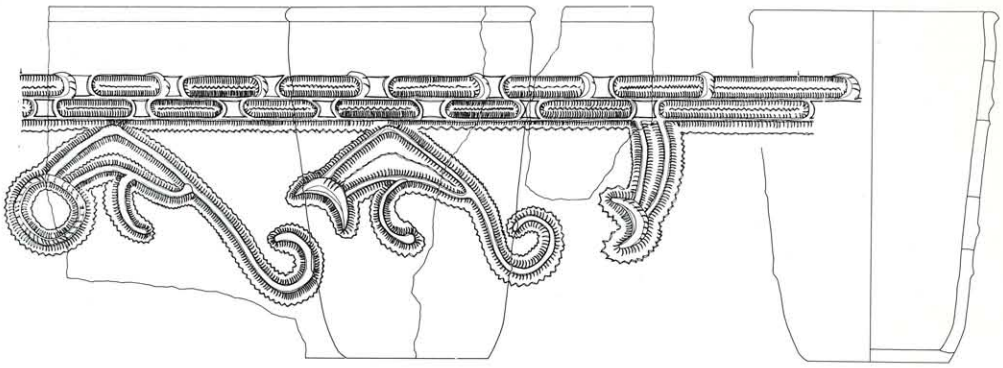
事務局　事務局長　木川千年（教育長）・次長　矢島雅幸（社会教育課長）・係長　永由桃介（社会教育係長）・係　小口秀孝・湯田坂公子・植松幸子（社会教育係）
調査員　宮坂虎次・鵜飼幸雄（尖石考古館）・唐木孝雄（永明小学校教諭）・宮坂光昭（諏訪市文化財審議委員）

調査参加者

一般　両角きよえ・藤森和助・矢崎弥太郎・竹村良一・原田　力・牛山はつみ・宮坂きよめ・田中文六・福田とよの・小林　幸・小林しま・牛山ます・牛山てる・牛山富美・牛山たまえ・小平すま子・茅野二水・原田七郎・細井喜美子・細田みや子・伊藤益一・伊藤志加・森本久美子・牛山みえ・竹村文彦・藤森民司・原田はま子・小林ひろむ・中村宏文

大学生　柳沢士郎（日本大学）・山田武文（専修大学）・岡田篤子（明治大学）・山田晃弘（東北大学）・小島糸子・守矢昌文・春日徳明・野口静男・小安和順（大正大学）・北原千文（国学院大学）・五味　聡（法政大学）・小平　通（東海大学）・窪田泰治・吉沢幸宣（信州大学）

高校生　小沢由香利・竹村志延・三井要子・三井修子・河角園子・横内やよい・中山真智子・北沢育子・窪田さゆみ・宮下真由美・藤森綾子（諏訪二葉高校地歴部）　河西克造・五味尚志・中山清昭・小松浩幸・小坂晴彦・永由照和・春日哲好（茅野高校地歴部）　小学生　永明小学校考古学クラブ



下ノ原遺跡

—第2次・3次調査概報—

昭和55年3月20日　発行

発行　茅野市教育委員会

印刷　中央印刷株式会社